

を犯すを免れず。夫れ河洛の澤盡きて、而して關内の化盛んに、北方の文物枯れて、而して南方の人文榮ふ、亦時を以て而して命せらるゝ所あるなり。埃及、亞西利亞、印度、波斯、非尼斯亞、希臘、羅馬、相踵て遞に起る、亦各時を以て而して命せらる。彼れ皆其の時に於て、人道と文明との宣布に最も力あるべき者、而して又其の跡に於て、各克く其任を盡せる者あるを見る。文明の中心、時と移動する所以の者、其由此に存す、今又將さに大に移らんとす、識者は實に久しく此の間の肯綮を了知して、我の將さに大に命せらるゝ所あらんとするを審にする也。

殷は夏の禮に因り、周は殷の禮に因り、而して損益する所あり、夷狄殘暴の侵襲を被るにあらざるよりは、大抵後に出る者漸くにして、整美に趨く、故に周は二代に鑑みて、郁々乎として文なることを得、三代の所謂禮は、後世の制度法令に同じ。唐の制度は隋に因り、又實に宇文周に原す、其の祖孝孫か雅樂を定むるや、梁陳の音は吳楚多く、周齊の音は胡夷多きを以て、古聲を考へて唐の雅樂を作ると云ふ、亦因習する所あるを見る也。希臘哲學の祖は多く埃及、非尼斯亞の間に學び、羅馬の學者、制法家、概ね希臘に遊學す、唐の文明は、半ば西域、印度の傳來に係る、南北の際よりして、渡天の

文明中心
前後の因習

特色得失
相代る

僧、西來の僧、頂背相望む者、以て之を致すこと有るなり。此を以て之を觀るに、文明中心の移動するや、後の中心、必ず前の中心に因ることあり、而して損益する所あり、前者の特色、或は失ふは、後者の特色の新た、に之に代る所以、而して各其時に宜しうす、以て人道と文明との系統を萬世に維持す。譬へば、猶ほ商那和修が龍奮迅定優婆塞、多か曉了すること能はざる所、如來の三昧は、諸の辟支佛、其名を誡らず、緣覺の三昧、一切聲聞、解了すること能はず、大目犍連、舍利弗等所入の三昧、其餘の羅漢、測度すること能はずといふがごとく、前聖後聖、其の揆を一にせずと雖も、其の各極致を成就するは、則ち同じ。前の文明の中心か成就する所、後の文明の中心か成就する所に、あらずと雖も、其の自然の神秘を發して、人道と文明とに裨益するあるは、則ち同じ。或は禮文を以てす、周の若し、或は幻技を以てす、印度の若し、或は哲學美術を以てす、希臘の若し、或は法律を以てす、羅馬の如し、而して其の前後文明の中心を鏈繫する者は、則ち學術の士、古を稽へ、今を揆り、以て新思想を創するに須つことある也。

西洋學術の輸入せられしより二十餘年、世人既に往々我が大學に望むに、徒らに彼に傳ふる所、生吞活剝、以て之を轉售するに止まらずして、其の新理論を發揮し、新學

世人の大
學に對す
る希望

學者の任

在野學者
の發奮

説を創立し、以て東方學術の特色を表見すべきを以てす、其の彼の地に留學せるより歸り、未だ十年を経ず、而して其の年齢皆五十に滿たざる博士を捉て、便ち強ふるに、新の學説を以てするは、酷なるに似たりと雖も、國民の情既に新文明の創立を翹企するを見るべく、古より民の聲に畏るゝ所の者、國民の希望は毎に無作に出で、之を克く遇むることなきを以てすれば、我か學術の早晩一新生面を開くは疑を容れざる所たり、且つ其在野學者の若きは、早く亞細亞大陸を探檢して、學術の新資料を蒐集するの已むべらざるを、倡道し、其學理に於ても、奮て新説の創興を試みる者あり、其の意に謂らく、四海事無し、熒熒揚らず、其の實力を以て、歐洲列國に示すべき者、武に由ることを得難ければ、則ち清平の臣民、以て國光を耀かすべき者、學術に若くはなしと、夫れ歐洲近代の文明は、賊に格物致知を以て特色とせり、然れども代りて而して文明の中心たる者、復た其の故路を履で、必ず理學に奮ふべきは、未だ知るべからざる所、或は我の極致を成就すべき者、決して此に在らじ。但だ前の文明を承て、之に超上せんとするの氣力は、一轉して特色の極致に至る所以、英邁卓絶の士一たび起らば、此の間の幹旋、擧手投足の勞のみなりと雖も、かの其の人の起るや、空

我の成就
すべき極
致

時態の變

しく其の生ずるを待つは、學者の本分に非ず、今の時に當りて、學術を專攻するの士、豈に徒爾にして已むべけんや。

天下一日事無きに安んずべからず、清平無事、力の以て伸ぶべきなしとせる者、數月の前、誰れか然らずと謂はん、而して今は則ち變意外に起り、難干戈に及ぶ、國民の意氣、勃然として、颯擧、幾と歐洲諸強國を藐視す、當局の人、其の謨を失らず、局を收むるに便宜を占めば、則ち我の威力日に以て伸暢、南は原田孫七郎、山田仁左衛門、北は間宮林藏、加波涉せる處を極め、西豊公が指畫せし大陸に及ぶ、我か風化を光被せしめんこと、蓋し十數年内の事たらん、東方の新極致を成就し、以て歐洲に代興して、新たに坤輿文明の中心たらんこと、反掌の間に在らざらんや、而して嚮日、實力の以て歐洲に示すなく、已むを得ずして、學術に奮ひ、聊か驕嫺なる白人をして、一顧を我に垂れしめんとせるの、太だ膽小なりしを、自ら晒ふべき也。

東方の新
極致

學者の國
運

且つ學者の國運に於ける關係、更にはより大なる者あり、夫れソクラテス、プラトあり、而して亞歷山あり、瞿曇あり、而して阿輸迦あり、ヴォルテール、ルソーあり、而してポナバルトあり、孔丘あり、而して嬴政劉徹あり、王通、智顛あり、而して李世民あり、

プラトの弟子は、亞歷山の師たり、摺曇の法は、阿輪迦の保護に弘まり、ゾオルテイヤ、ルソーの思想は、ボナバルト暴興の運を啓き、儒者荀卿の弟子秦氏を助けて、千古の變局を成し、儒者董仲舒漢氏の學術を大一統し、王通の門生、世民の股肱たり、玄奘、杜順、慧能、皆智顛の風を聞て起る者、學者の取れる天下なしと謂て之を輕ずへからざる也、而して學者の興る、時運と相感するあること、孔子が儒師の職を離れて、儒家者流を立つる、齊桓晋文か、流離の餘、天子を挾むに似、ソクラテス、プラトの起る、實にヘリクレスの政治に催さる、ゾオルテイヤ、ルソーの前、リシエリユの覇業あり、蘇綽の宇文氏を助くる、混一の芽既に抽く、釋迦の前後、轉輪聖王の當さに出づべきこと、久しく國民の信望する所たりし也、夫れ南は原田孫七郎、山田仁左衛門か、經略の跡より、北は間宮林藏か、跋渉せる地、西は豊太閤か、指畫せる國を并せて、風化及はざるなし、此の如き時運、以て新文明中心の先聲たる大學者を感じするに足らずと謂ふか、吾れ今の學者か自ら疆めずして其の本分を後生に推諉し、以て斯邦をして其の人道に盡すの天職を奉行するに於て、一日怠慢の咎を犯さしむることを恕する能はず。

(明治廿七年十一月稿)

文明中心の先聲

畫道の一大疑問 (上篇)

畫とは何ぞや

人願の技能、能く宇宙活動の玄機に契ふ者、是を美術と謂ふ、繪畫は其の科に屬す。其の籍りて而して立つ所の物は、平面上に於ける形象と色彩となり、其の極致を成す所以の法は、筆墨傳彩の調和なり、其の興を托する所の題目は、山水花卉翎毛仙佛人物等なり。其の運用に至りては、或は筆に専らにして墨に略し、或は筆墨に假りて、傳彩を去り、或は筆墨傳彩並び備へ兼ね存す、其の題目に至りても、其の托せんと欲する所興趣、既に一なることを得ざれば、則ち其の寫す所も亦擇ぶ所あるを免かれず、苟くも其の玄機に契ひ、其の極致を得る、何れを取り何れを舍つるとしてか可ならざることあらん。唯だ夫の技を操るの人性稟に偏あり、而して遭ふ所の時、處る所の地、好尚同じからざれば、則ち畫風に今古の異あり、畫派に諸家の別あるは、理勢の自ら臻る、復何ぞ怪しむに足らんや、抑も彼の後れ出る者、縦に數千年既に存するの

畫風畫派の岐分

蹟を觀て、横に百家美を熾ふるの際に生る、前人の蹊逕を趁へば、往々疑ふ所なきこと能はず、我より古を作れば、動もすれば、雅尙に入り難きを思ふ、徘徊彷徨として適從する所に迷ふ、蓋し當代の腴は、當代に在て既に喫し盡す、後世之に法らんとするも、殘肴冷炙、舌に上すに堪へず、斯人の美は、斯人に在て始めて發揮すべし、後世之に倣はんとするも、零芥賸馥、人を飫かすに足らず、是れ作家の屢々筆を投じて其の安心立命の地を得がたきに苦しむ所、而して一代人心か屢々其時を代表するの美術なきに歎焉たる所以なり。

夫れ明治の時は、實に開闢而還の一大變態に際會せる者、彼の往昔に在て、其の親しく相交通し、文物相影響せるは、止だ支那ありし者、今や四海比隣、其の國情風尙、最も相踈違せる西洋諸國、思想習俗、相浸潤せざることなし、内には則ち七百年覇者の治、一旦古に復せるのみならず、新法創制、耳目を一變し、社會の綱紀、人心の秉彜、趨舍未だ明かならず、簡擇惑ふことあり、更革の當時、美術が殆んど一大厄運に瀕せしを異しむことなき也、創業の勳臣は多く、鄙裔樸學の徒より出で、所謂實學儒教と、耽古國學とを奉じて、儉の野に陷いるを恤へずして、文の華に流るゝを力排す、故に美術の

倫理と相關し、實用と相渉る所以、又其の人生至靈の活動と相感發する所以に至りては、固より其の見の及ぶ所に非らず、又神佛甄別の論、廢佛毀釋の議、暴風急雨の樹を抜き、陵に棄るか若く、寺院祠觀、千餘年間、美術の府庫、殘敗零ぼ盡く、然れども舊物の厄運に際せしは、獨り美術に止まらず、美術は則ち其の復興の最も早くして、而して一切文物復興の氣運に動機たりし者、是れ實に歐洲に在て、博覽會の賞鑑、始めて晦蒙の常路を醒せしに因り、美術に獨立の能力あるを感じ、其の灰燼を收めて、復た殘燼を吹くに至りし也、是に於て繪畫は實に其の首要の一科として、獎勵振作の道、頗る朝野の間に講究せられ、其の鑑賞批評の法、新たに薦紳の徒に倡道せられ、而して一大疑問は亦隨て世人の口に發して、當家の前に掲げられたり、曰く今日の繪畫を如何すべきと。

工部省か美術の生員を養て、西風の技術を傳へたるは、美術獨立思想の勃興と偕に熄みぬ、美術に關する諸協會の踵起、美術學校の設置、國風美術の氣焰再燃に力めざるなし、而してかの一大疑問に至りては、未だ渙然として氷釋すること能はざる也、一時美術の厄運に乗じ、跋扈を俗間に極めたる、一派龜策の文人畫は屏息せり、而し

て土佐、狩野、南宗、四條、容齋等諸派の畫家、日夜に其の技に精を研かざるなし、抑もかの一大疑問に至りては、未だ其の解を至當の地に得ざる也。橋本雅邦の若き、百年來絶て無くして希に觀るの筆力たり、狩野氏の矩矱を奉じて、間々新意を出す、土佐、南宗の若きも、往々名工あり、四條、容齋の若き、人々にして學び易く、而して其の群に抜くの能者に乏しからず、後進の此等諸派に趨き學ぶ者、林々として寔に繁し、能く其の技能を振て、此の一大疑問に對ふる者、何人か果して是なる。豈に先輩の技を成すや、猶ほかの革新の前に在りて、未だ其の變態の移す所と爲らず、各々一隅より入りて、其の圈套を出づること能はず、後進の技を學ぶや、先づ氣運變態の動かす所となりて、心に一定の主なく、一隅より入ると雖も、門庭に彷徨して、堂奥に躋ること能はず、我より古を作り、而して能く新時代の雅尙に入り、新風格の極致を得ることは、或は心至りて而して手應せず、或は力任ふべくして、而して見足らず、俗間の好尙、之を前に濫り、妄庸の鑑賞、之を後に縛し、跡隨不羈の材、奔逸絶塵の能、因りて頭地を出す所なきに由るに非らずや。

前蹤の研
駁

顧みて前蹤を鑿み、一生面を開き、一流派を成せる大家鉅匠が力を得る所以の者を

先進後進
可

巨勢土佐
二氏

察すれば、其の苦心經營の蹟、以て我か前路を燭して、我より古を作るの道、何くより入るべきを覷破するに足る者あり、譬を取らば、近きを貴ぶ、之を本朝の變遷に證せんか。上世の名家、指を巨勢氏に屈す、蓋し寧樂の美術は、粹を彫刻に鍾め、往々名畫ありと雖も、大に振ふに至らず、平安の初より、唐の文物、沛然として流入し、繪畫も亦大に興る、其の傑作大筆、今に傳ふる者少しと雖も、意ふに其の唐賢に規摹して、自ら機軸を出すに及ばず、巨勢氏乃ち之を大成し、其の兒孫、土佐氏と相繼承して、修飾して、之を潤色せり、是よりの後畫風一變、其の筆の真細は疎逸となり、其の畫題は唐土の資料よりして本邦の景趣に移る、金岡、其の子公望、其の曾孫弘高と、飛鳥部常則等の若きは正さに其の關鍵に當り、前蹤を集成して、而して後昆を啓發せる也。此時に當り、紀貫之等は、其の唐土詩文流行の末運に於て、國文國歌を再興し、菅原道真は書體を變じて、和樣を創意し、佛師定朝は空海時期の佛像を變じて、新式を定めたり、畫風の變移、正に此等と相先後す、當時鉅匠、其の必ず畫風の獨立せざるべからざるを認め、奮て新意を出せると否とは、未だ知るべからざる者ありと雖も、其の能く時情の趨く所に隨て、而して醇雅溫麗の趣を成せる者、其れ亦良工の苦心を経る者なく

ばあらざる也。大勢土佐氏に定まり、一たび畫權を操りしより、世々にして名工を出さざるに非らず、而かも時俗の漸やく變ずる、宋元習風の傳播、先づ佛法よりして、乃ち禪家の興起を見る、如拙周文、北宗の筆意を傳へて、明兆、雪舟の若き大家も亦其の間に崛起せり、此れ實に畫風の再變にして、其の時情が方さに間雅温和に飽て、而して豪健沈鬱を愛するの會に當る者、故に狩野氏、婚を土佐氏に通じて、従前畫風を兼修すと雖も、其の勝場は竟に舶齋の趣味に歸す、探幽齋は實に當時の金剛なり、室町氏繪畫の骨法風格、集めて之を大成し、融して之を陶化し、北宗の流、此より停滯せり。徳川氏の文物は、歧して兩派となり、一は上行し、一は下行す、下行する者は、淨瑠璃、歌舞伎、洒落本、草艸紙、讀本となり、上行する者は、儒學の流行、國學の復興となり、俳諧は上下の間に出入す、畫風の變遷を觀るに、又其跡を同じうする者あり、又兵衛、一蝶、師宣、祐信等は、其の下行の運に應じ、土佐、狩野の筆より出て、而して題目を當代の風俗に取る、此れ已に一變態に屬す、沈詮、伊海等の舶客、大雅、蕪村等の雅人、其の上行の運に應じ、南畫の風格を傳へて、新たに海外の趣味を播す、宗達、光琳は、別格を創意して、更に一幟を建てたり、是れ正さに常則、公望、弘高等か相踵で新意を出せるが若し、

而して大勢遂に圓山氏に定まれり、是れ猶ほ土佐氏か中世の畫柄を握りしか如く、爾來百年、百家並び起ると雖も、能く與に盛を競ふことなし。亦實に徳川氏文物か寶曆より以て寛政文化に至るの際に於て一變し、該園修辭は八家宋詩と爲り、縣居の萬葉は桂園の新派と爲り、淨瑠璃、八文字屋本は洒落本、草艸紙と爲り、荒事丹前は所作世話物となり、土佐江戸節は豊後節と爲るの時會に膺り、應舉氏卓出の材を以て、寫生の新派を開き、以て當時の耳目を一洗せし功なり、其の始め狩野氏より入り、而して狩野氏より出でず、其の嘗て南北兩派を參稽して、竟に此に安心の地を求めず、偶然の故に非ざりして、苦心の餘に發し、以て其脚を寫生に樹立せるを見るに、蓋し經營慘憺、夷の思ふ所に匪ざる者あらん、何となれば其の既に習ふ所を棄て、其の未だ學はざる所を創む、成れば則ち其の時好に合するや否やを知る能はず、成らざれば則ち半生の刻苦、泡沫に歸せん、應舉が此際に於けるの情、其の百年の盛名に價して餘ある者、此の如きは豈亦今日の大疑問に對へんとする者の尤も同情を表すべき所にあらざや。

(明治廿八年三月稿)

若し今の世が不平ならば著述さいふ者もある世ならずや之を名山に隠して五百歳の知己を待た人も宜しからずやさいふもあるべけれど既に世に在るか中に生きたる人間に向て感化を及ぼし兼ねなから其身朽ちて其の過失弱點は皆世人に忘れられ其の不遇のみ世に憐れからるゝ時に至り我れ耻かまき空言を垂れし力に藉りて此の名字を不朽にし身に負はぬ名を得んと謀ること最も亦邊幅を修飾して當世に容れられんことを謀るものと相距ること幾何なるへき一生五十年親戚故舊同胞の涙をも流させ得ずして千古萬古の英雄漢か涙を得たしといひたる様に薄情な考は持つまじき者と思ひ候(岡岡生谷日京君書の一節)

附
錄
終

惡夢爲囚覺尙悲。浩歌一曲起呼卮。顛狂故態何緣酒。古拙文章不入時。身後千秋當鬼笑。眼前數子有心知。高才得意竟誰是。非死窮途未足奇。

君道如今思讀書。讀書豈識幽憂始。且看金馬門前客。四十萬言飢欲死。

關西文運論(大坂朝日)

始にして儒學中にして醫學終にして國學而して和歌詩文國史神道は具して其中に在り文化湊合中心説をば經とし階級異同説をば緯とし材を蒐むるこも博く所を下すこも確かに三十篇を累ね二百日を經以て其半を成せるものしかも名は關西を冠らしめたりと雖實は之を借りて徳川時代の學問を論せるものなり作者は溜々たる著述仲間に入れらるゝを愧つべきに自恃庵の作なりと認め其健在を視せる新聞有りしも笑止なれや。

湖南去住澗河隈筆硯依然乘興催臣朔讀書飢欲死買生有
淚志堪哀治安雖策將何獻滑稽能雄豈慕漢一部關西文運
論平生蘊蓄發揮來。

是れ太陽第三篇第壹號に載する所、謫天情仙が「前語陽秋」中の一節なり。情仙已に題詩一律あり、今又此篇を見る、過獎敢て當らざる者ありと雖も、知己の言、棄つるに忍びず、故に更に請て此に附記す云ふ。

明治三十年一月七日印刷
明治三十年一月十日發行

正價金三十五錢

著者 内藤虎次郎

發行者 柴田資郎
東京市神田區裏神保町五番地

印刷人 多田三彌
東京市京橋區山城町八番地

發行所 政教社
東京市神田區南甲賀町八番地

印刷所 惠愛堂
東京市京橋區山城町八番地

發賣所 東華堂
東京市區神田區裏神保町五番地



大 賣 捌

東京市京橋區銀坐三丁目	文海堂
東京市京橋區鎗屋町	北隆館
東京市京橋區尾張町	東海堂
東京市神田區表神保町	東京堂
大阪市東區備後町	吉岡平助
京都市木屋町二條	貝葉書院
秋田縣仙北郡大曲町	板屋五郎左衛門
全	榑田繁治
秋田縣平鹿郡横手町	鮮進堂
秋田市茶町	成見清兵衛
秋田縣山本郡能代港	積信堂
秋田縣鹿角郡花輪町	奈良源次郎

湖南内藤虎次郎著

諸葛武侯

近刊

此れ彼土上下二千年間、最も人氣ある人物なり、苟くも性命を亂世に全らし、
 以て、聞達を諸侯に求めず、三顧廬を出で、六尺孤を托せらる、力を興復に効し、
 斃れて而る後に已む。著者が何等の眼孔を以て若き人物と若き人物が處せし
 時勢とを觀察せるかは、請ふ之を諸葛武侯に看よ。

黒頭尊者著

涙珠唾珠

近刊

嘻笑怒罵、盡く文章と爲る、此れ文士の手段か。漣々たる涕淚、紛々たる咳唾、
 一々珠玉と爲る、此れ尊者が通力か。玉か石か、尊者豈に自ら知らんや。試み
 之を地に擲て、若し鏗爾として金聲せば、則ち聴く者の耳之を爲す也。

大	東京市京橋區銀坐三丁目	文海堂
賣	東京市京橋區鈴屋町	北隆館
捌	東京市京橋區尾張町	東海堂
	東京市神田區表神保町	東京堂
	大阪市東區備後町	吉岡平助
	京都市本願町二條	貝葉書院
	秋田縣仙北郡大曲町	板屋五郎左衛門
	全	榎田繁治
	秋田縣平泉郡横手町	鮮進堂
	秋田市茶町	成見清兵衛
	秋田縣山本郡能代港	積信堂
	秋田縣鹿角郡花輪町	奈良源次郎

湖南内藤虎次郎著

諸葛武侯

近刊

此れ彼土上下二千年間、最も人氣ある人物なり、苟くも性命を亂世に全うして、聞達を諸侯に求めず、三顧廬を出で、六尺孤を托せらる、力を興復に効し、斃れて而る後に已む。著者が何等の眼孔を以て若き人物と若き人物が處せし時勢とを觀察せるかは、請ふ之を諸葛武侯に看よ。

黑頭尊者著

淚珠唾珠

近刊

嘻笑怒罵、盡く文章と爲る、此れ文士の手段か。漣々たる涕淚、紛々たる咳唾、一々珠玉と爲る、此れ尊者が通力か。玉か石か、尊者豈に自ら知らんや。試みに之を地に擲て、若し鏗爾として金聲せば、則ち聽く者の耳之を爲す也。

旭宇新岡久頼翁書

いろは三體帖

近刊

短冊習字帖

近刊

假字は草書より出で、加ふるに國風の優麗を以てし、廻風雪を舞はし、落花草に依るの妙あるを尙ぶ、書を學ぶ者の最も苦しむ所とす。新岡旭宇翁、今世の草聖を以て、又心を假字の書法に潜め、二王の神韵に兼ゆるに三蹟の飄逸を以てし、六朝より入りて上代様より出で、寫娜たること游絲の若く、天矯たること蛇闘の如し、一種の書格、世俗筆道家流の至る能はざる所なり。今特に初學者に圭臬を示さんが爲めに此帖を草せらる、弊堂が切に請て之を梓行するは、亦今世俗書の陋態を一掃せんとするの微意に出づ、此帖一たび出でば、庶幾くは假字書格一變せんか。

附記する所、れ、ぬ、ん、の解の若き、數百年假字書法の誤謬を正され、諸家未發の明解と稱せらる、此れ緒餘と雖も、亦以て翁が斯道に深遠なる一端を知るに足るべし。

各宗管長肖像(寫真版)入
大内青巒居士序
新明教主筆 加藤咄堂 著
●總ふり假名
●製本美麗金字入

佛敎界 四 個 格 言

一部定價三十五錢
廿部以上一割五分引
郵 稅 六 錢

目 次
第一篇 現今の四個格言問題●各宗協會の性質●各宗綱要の編纂●譯論の起因●調和策及其破裂●裁判の經過●本問題に對する評論。
第二篇 四個格言の評論●日蓮立教以前の佛敎●日蓮上人●念佛無開論●禪天魔論●真言亡國論●律國賊論●四個格言の真相●日蓮宗の本旨●過去に於ける四個格言問題。
第三篇 四個格言問題の價值●時勢の傾向と四個格言問題●宗教家の本務と四個格言問題●各宗合同と四個格言問題。

日蓮宗妙滿寺派、對各宗協會事件は、目下の大問題なり、而かも俗界の判談は之を決するに足らず、著者於之乎佛敎教理の法廷に立ち、至公至正の眼光と、痛快銳利の筆法とを以て之が鐵案を下す、眞に之れ本問題最後の宣告なり、讀ふ左の新聞雜誌か評する所を見て、本書の如何に江湖に歡迎せらるゝかを知れ。

●(東京朝日新聞)曰く。佛敎界の大問題として。一時紛囂を極めつる四個格言を主題として。専ら評論講述せる者。著者加藤咄堂氏は。之を解釋評論するに於て。最も適當の地位にありと稱せらる。(中略)

音に時事問題を知るに便なるのみならず。亦以て各宗の現状を窺ふに足る者あり。云々(讀賣新聞)曰く(上略)論旨明哲觀察公平。備に此の中の消息を盡せり。局の内外を問はず。熟讀せば至公の道を知るを得ん。(東京日々新聞)曰く(上略)局外者は俄に烏の雌雄を知るに苦まざるを得ず。咄堂居士最も公平に之を説述せり。(日本)曰く。妙満寺派と各宗協會との紛争顛末を述録したる點に於ては。本書の如く詳細なるものあかるべし。云々(毎日新聞)曰く(上略)格言問題の尙ほ終結せざる今日。世の宗教觀ある者一讀して可なり。(日本人)曰く。近時教界何ぞ其れ多事なるや。則ち多事なりと雖。而かも其の紛擾の一も明瞭に解釋せられたるはあらず。四個格言の如きは蓋し其の。想ふに加藤氏の四個格言は。この近來の大問題たる四個格言事件を尤も公平に論評したるもの。云々(早稲田文學)曰く(上略)叙述精細。立論はねしなべて正確。現今の宗教界を知らんと欲する者の座右に具ふべきもの。(明教新誌)曰く(上略)其の慨世の氣。憂法の節。將に論端に勃興し來りて。傘大の眼光。椽大の筆鋒。讀者をして無量の感慨を起さしむ。云々(成田志林)曰く(上略)著者が得意の健筆。奇抜の學識を以て。彼の日蓮宗の四個格言事件を。滔々説き來り論じ去りて遺す所なし。(中略)議論精通にして着眼高く。文章流暢にして興味深く。一讀再讀三讀して尙ほ倦まざるものなり。實に好著述と云ふべし。云々(大日本)曰く(上略)著者は四個格言を以て。佛教各宗比較論となし。根本的に歴史的に。比較研究の導火たらんと欲するものあり。其の見解當を得たりと云ふべきなり。云々(日本宗教)曰く(上略)委曲を記して遺憾なし。咄堂氏の流麗にして雄健なる筆力。苦もかく一讀下せしむ。此の件に就て注目するもの。一本を座右に供ふるの要あり。(禪學)曰く(上略)此の問題を以て。航海を争擾ならしむる秋にあらせと云ふ如き。著者の識見の高きと。之を著すの眞意とを窺ふべきなり。云々(通俗佛教新聞)曰く(上略)一讀著者の博覽強識なるを知り。再讀四個格言の何物たるを知り。三讀日蓮上人の開教當時の意氣込を知る。云々

發行所

東京市神田區
裏神保町五番地

東華堂

教育日本書會編纂

大日本帝國模形地圖

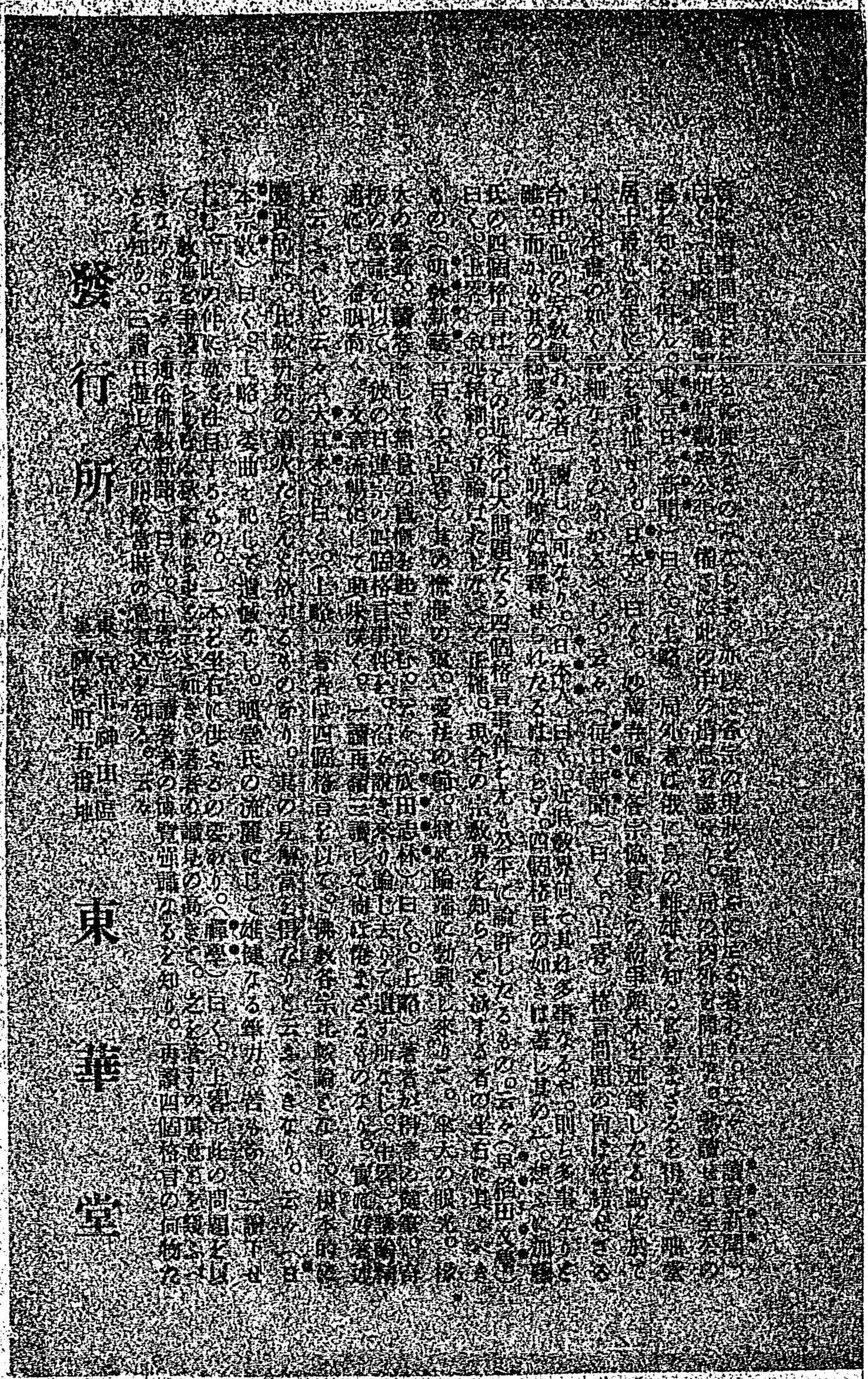
和本美裝
定價金拾錢○郵稅金貳錢

地理學科ニ於て。其國を暗寫スルハ。思想を精進ニシテ。記憶を牢固ニスル上ニ於テ。大ニ益アルト云フ。更ニ此等ニ要セス。然レトモ。此等タル頗ル困難ニシテ。且ツ興味少キカタメ。其結果ヲ得ルモノ甚ク稀ニシテ。功勞相償ハサル概ナキ能ハス。試ミニ大日本帝國を編ミ之ヲ閱セン。一讀入道。八十餘國。其地形タル。圓カ圓ナラズ。方カ方ナラズ。千種萬類名狀ス。カラサルモノモ。今筆ヲ執リテ之ヲ暗寫セシム。腦中ニ印スル所ノ形象ハ。地圖ヲ讀ムルト共ニ早ク。已ニ増進ニシテ。漠然トシテ風ヲ捉フル如ク。茫乎トシテ影ヲ退ケ如ク。更ニ筆ノ下ニ。其ニ苦マシ。幼童如何ニ記憶力ニ富ムト雖モ。一々之ヲ聯繫シ。深ク怪ムニ足ラサルナリ。本國ハ。本邦各國ノ地形。一々類似ノ物體ニ得ルモノ。甚ク倫ナルト云フ。深ク怪ムニ足ラサルナリ。本國ハ。本邦各國ノ地形。一々類似ノ物體ニ模擬シ。其物體。一々地形ノ觀念ヲ伴生シ。約體ヲ寫ストキハ。筆下自ラ地形生成シ來ル便ヲ得セシメントス。名ツケテ大日本帝國模形地圖ト云フ。尙ホ山河都邑ノ配置。此法ヲ模倣シ。所謂觀念聯生ノ法ニヨラハ。更ニ妙ナラン。假令ハ飛驒ノ地。日本ヲ描カントスルニ。先ツ紙面ニ寫シテ。其地形ヲ定メ。眼ヲ以テ高山トシ。上下ノ階ヲ限リ。飛驒川トシ。信濃ノ界ナル。兵衛橋岳ノ二山ヲ以テ。兩耳ニ當ツルカ如キ是ナリ。學生タルモノ。正科ノ餘暇。當ニ之ヲ編ミ。玩味スルコトアラハ。先キノ難ヲ變シテ。易トナシ。無味ヲ化シテ。有味トナスニ於テ。其功ナキニアラザレシ。

發行所
發賣元

東京市本郷區區區
東京市神田區裏神保町

教育日本書會
東華堂



發行所 東京市本郷區眞砂町 東華堂

教育日本畫會編纂

大日本帝國模形地圖

刊 既

和本美裝

定價金拾錢○郵税金貳錢

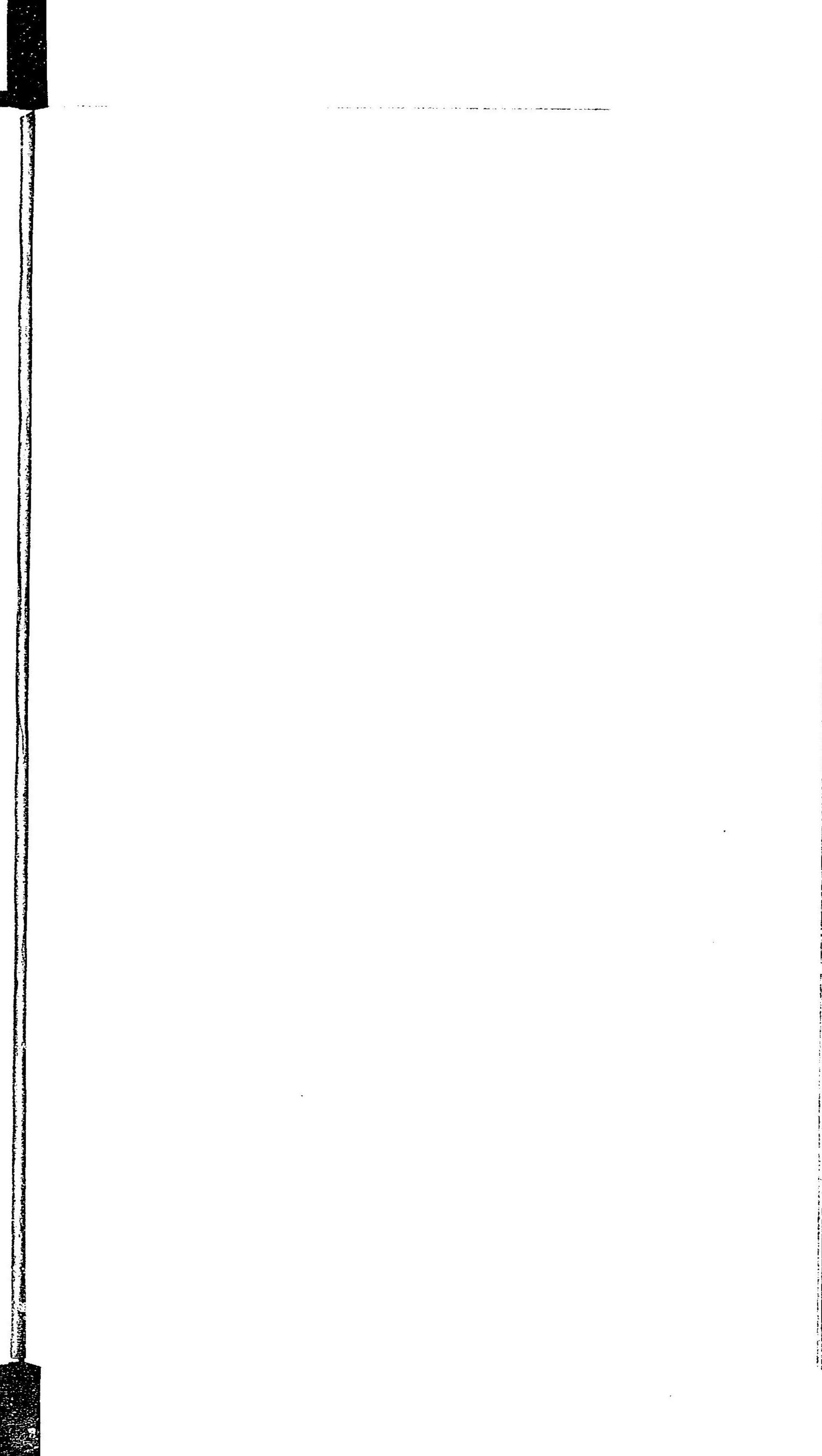
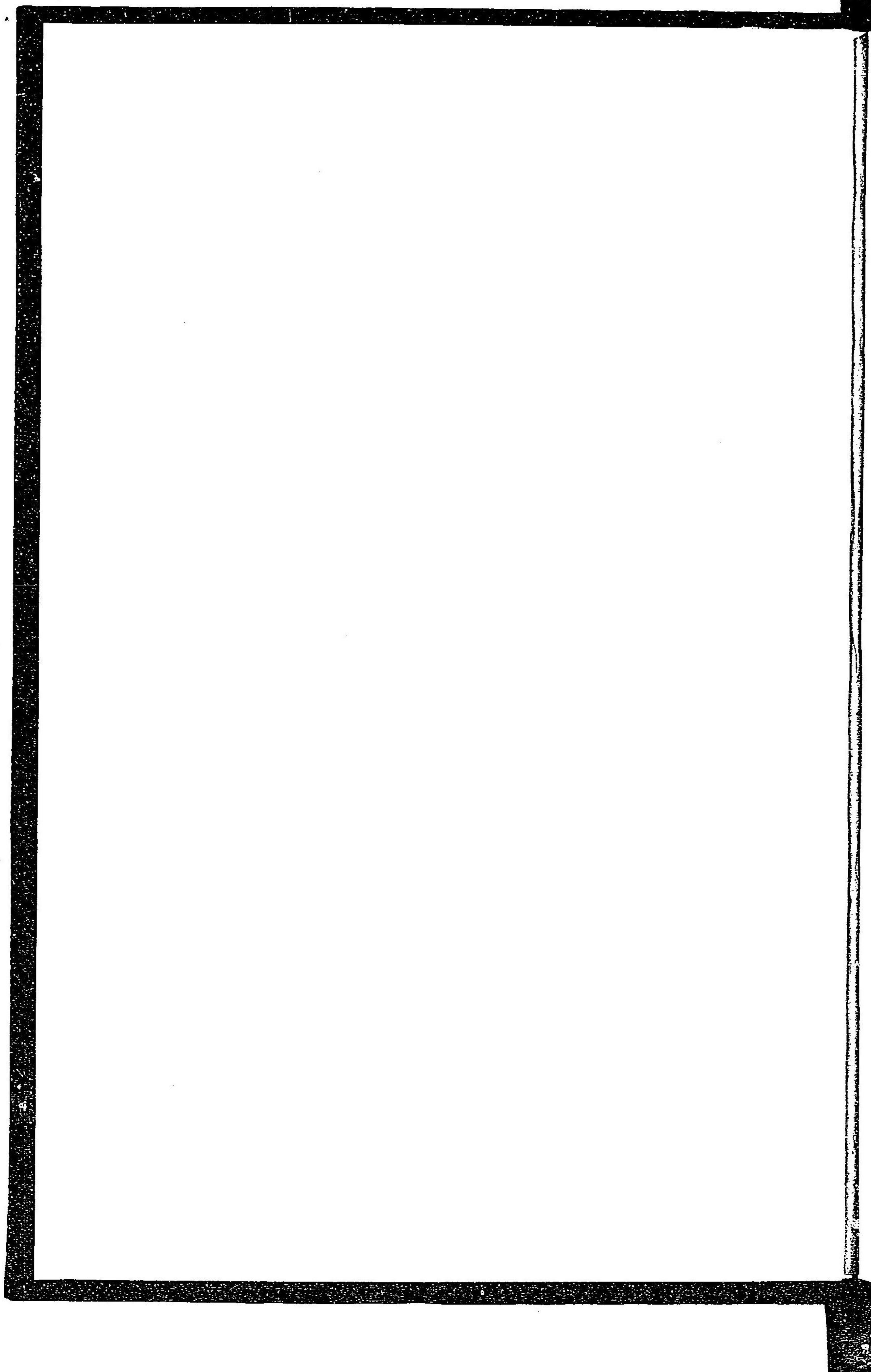
地理學科ニ於テ。地圖ヲ暗寫スルハ。思想ヲ精確ニシ。記憶ヲ牢固ニスル上ニ於テ。大ニ益アルコト。今更喋言ヲ要セス。然レトモ。此事タル頗ル困難ニシテ。且ツ興味少キカタメ。其結果ヲ得ルモノ甚タ稀ニシテ。功勞相償ハサル憾ナキ能ハス。試ミニ大日本地圖ヲ繕キ之ヲ閱センニ。一綫入道。八十餘國。其地形タル。圓カ圓ナラス。方カ方ナラス。千種萬類名狀スヘカラサルモノ多カラシ。今筆ヲ執リテ之ヲ暗寫セシニ。腦中ニ印スル所ノ形象ハ。地圖ヲ撤スルト共ニ早ク已ニ墮滅ニ歸シ。漠然トシテ風ヲ捉フル如ク。茫乎トシテ影ヲ追フ如ク。更ニ筆ノ下スヘキナキニ苦マン。幼童如何ニ記憶力ニ富ムト雖モ。一々之ヲ腦漿ニ浸潤セシメ置カンコト。實ニ至難ト云フヘシ。從來地圖暗寫ノ。其結果ヲ得ルモノ。甚タ稀ナルコト。深ク怪ムニ足ラサルナリ。本圖ハ。本邦各國ノ地形ヲ一々類似ノ物體ニ模擬シ。其物體ニヨリテ地形ノ觀念ヲ伴生シ。物體ヲ寫ストキハ。筆下自ラ地形生成シ來ル便ヲ得セシメントス。名ツケテ大日本帝國模形地圖ト云フ。尙ホ山河都邑ノ配置モ此法ヲ敷衍シ。所謂觀念聯生ノ法ニヨラハ更ニ妙ナラン。假令ハ飛驒ノ地圖ヲ描カントスルニ。先ツ狐面ヲ寫シテ其地形ヲ定メ。眼ヲ以テ高山トシ。上下ノ階ヲ限リテ飛驒川トシ。信濃ノ界ナル。乘鞍槍岳ノ二山ヲ以テ。兩耳ニ當ツルカ如キ是ナリ。學生タルモノ正科ノ餘暇。當ニ之ヲ繕キ玩味スルコトアラハ。先キノ難ヲ變シテ易トナシ。無味ヲ化シテ有味トナスニ於テ其功ナキニアラサルヘシ。

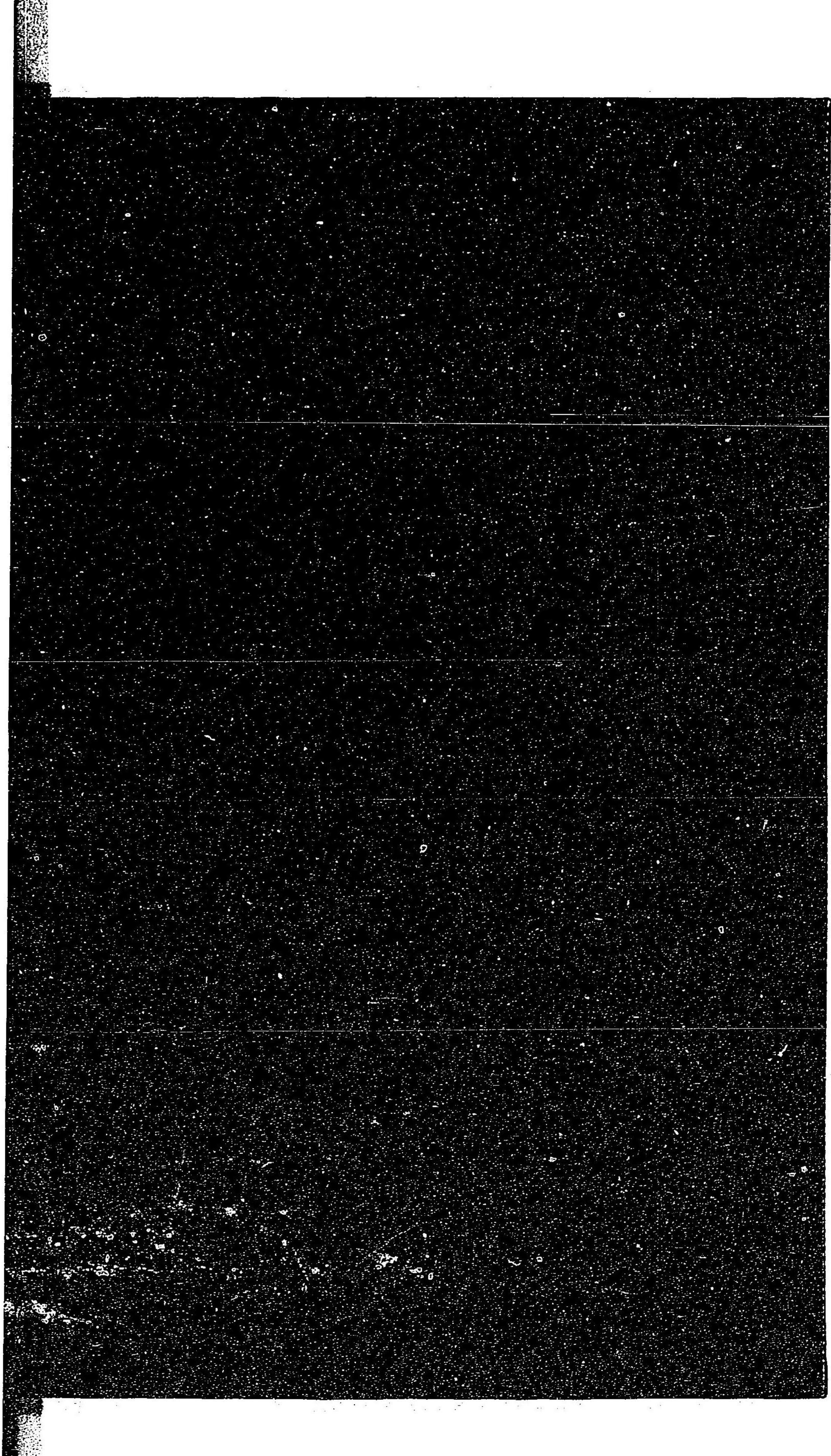
發行所 發賣元

東京市本郷區眞砂町 東京市神田裏神保町

教育日本畫會 東華堂

4 E-12





121.3
N262k
A

008931-000-7

121.3-N262kS

近世文学史論

内藤 湖南/著

M30

AAD-0034



